

研修会のお知らせ  
26ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年9月1日発行

2015.9  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

9号

第37巻  
No.314



ネナシカズラ *Cuscuta japonica* Choisy (ヒルガオ科 *Convolvulaceae*)

**生薬**

トシシ（菟糸子）夏から秋にかけて、果実が完熟する前に寄主ごと刈取り、陽乾した後たたいて種子を落し、箕でふるって種子だけにします。

**成分**

$\beta$ -carotene,  $\gamma$ -carotene, 5,6-epoxy- $\alpha$ -carotene, taraxanthin, lutein 等。

**効能**

茯苓丸、小菟絲子丸などの漢方処方に滋養強壯剤として強精、遺精、夜尿症、淋病、膝や腰の冷え、頻尿、目眩などを目的として配合される。薬用酒として滋養強壯に飲用される。

生薬 ネナシカズラ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



『神農本草経』の上品に収載され「一名菟蘆。味辛平。山谷に生ず。主に断傷を続ける。不足を補う。気力を益す。人を肥やし健やかにする。長期服用すれば目を明らかにする。身を軽くし年を延べる」と記され、古くから強壯薬として用いられていたようです。

ヒルガオ科のネナシカズラ属植物とされていますが、寄生植物で葉緑体無く、花冠の内面に小さな鱗片があるなど、明らかに他のヒルガオ科植物と区別できるため、ネナシカズラ科 (*Cuscutaceae*) に分類されることもあります。根が無く、葉緑体もない植物をどのように分類してよいのか分らず、秦の始皇8年 (B.C.239) に完成したと伝えられる『呂氏春秋』に「或は菟絲には根がないともいふが、その根に屬かぬけれども茯苓がそれだ」とあり、『淮南子』(淮南王B.C.179-122) や『抱朴子』(葛洪283-343)、南北朝の劉宋 (420-479) の頃の『龜策列傳』にも同様の記載があり、ネナシカズラに根が無いことから、根に当たる部分は茯苓であると伝えられていました。また、毛萇 (漢代) の詩の注や『吳晋本草』(239) に「兔絲一名松蘿」と記されています。松蘿は恐らくサルオガセ (*Usnea longissima*) のことで、根の無い寄生植物であることが同一物と間違われたものと考えられます。しかし、同じ三国時代の陸機 (261-303) の『詩疏』には「兔絲は草上に蔓生し、黄赤にして金のやうだ。松蘿ではない。松蘿は蔓延し、枝を生じ、正青で兔絲と殊だ異ふ」と言い、否定しています。茯苓についても六朝時代になると陶弘景 (456-536) は「舊い言傳へに [下に茯苓あればうえに菟絲あり] といふが、必ずしもさういふわけでもない」と述べ、違うものであると言っています。明代になると寧獻王 (1378-1448) の『庚申玉冊』に同属植物のマメダオシ (*C. australis*) を指しているものと思われる詳しい説明があります。

ネナシカズラ属の植物は世界に約150種が知られていますが、中国や日本に自生し、主に薬用に供される種はネナシカズラ (中国名大菟糸子) とハマネナシカズラ (小粒菟糸子 *C. chinensis*)、マメダオシ (大豆菟糸子) の3種です。いずれも一年生の寄生植物で、葉緑素を持たず、吸盤で寄生すると宿主から養分を吸収し生育するため判別は困難ですが、生育地の違いや茎の太さ、花の大きさ、花柱の数などで判別することが可能です。

国内では『本草和名』(918) に「和名祢奈之久佐 (ねなしぐさ)」と初めて和名が登場し、『延喜式』(927) の典薬寮に美濃国二斗一升を最大として6ヶ国から寄進されています。江戸時代後期になると正確な観察がなされ、『本草綱目啓蒙』(1803) にはその形態が現在の植物辞典より詳しいと思われる程の説明がなされ、その末尾には「一種海辺に生するものは蔓細く子小なり。今薬舗に売るもの多くはこれなり」とハマネナシカズラの事も記されています。

(村上守一 記)